

## 特集

## モンゴル招聘・訪問報告

ぱれっとインターナショナル・ジャパン(PIJ)  
国際交流事業

PIJの活動として5月に訪問をしたモンゴルについて、4月のモンゴルからの研修生のぱれっと受け入れ、6月23日に行なったモンゴル・ケニア合同報告会の様子を報告します。

モンゴルの訪問は昨年5月以来1年ぶりとなります。今回は、受け入れ団体であるAPDC（障がい児親の会）コーディネートの下、PIJ代表谷口、理事の田口、事務局の西川の3名で訪問をしました。ここでは田口、西川が主に訪問した5月3日から5日までの3日間の報告を中心に行ないます。

## ◆◆【5月3日～5日の現地訪問報告】◆◆

## 1. APDC 訪問と講演会の実施

受け入れ団体である APDC (Association of Parents with Disabled Children) は、モンゴルにおいて障がいのある子を持つ親の会です。初日はその事務所を訪ね、リハビリテーション、障がい児の保育、相談、移行支援プログラムを展開している事業の現場見学と説明を受けました。特徴のあるのが移行支援プログラムです。知的に障がいのある方の自立生活のモデルづくりを目標としている 2016 年 9 月から始まったプログラムです。主な活動としては、外出をする余暇活動や手作りの作品作りをしています。作品はまだ、販売できる体制が整っておらず、障がいのある方の就労支援には至っていません。モンゴルには障がいのある方が、社会との接点が少ないことを感じました。

午後は、ホテルに移動して APDC 主催の講演会に参加をしました。講演内容は、「モ

ンゴルにおける障がい者の現状と前述の移行支援プログラムの説明（APDC 職員）」、「ボランティアについて（田口）」、「APDC 代表のセレンゲさんが日本で見てきたこと（様子は後頁参照）」といった発表の三本立てでした。日本とモンゴルの違いなど質疑応答を含めて活発に議論をしました。

## 2. 政府・行政機関の訪問

## ●モンゴル政府訪問

翌日は人口開発局と障害管理局の局長とお会いしました。モンゴルの障がい者は、2017 年度の調査で全人口の 3.2%。統計局と合同で、障がい者の人口や障がいの種類などあらゆる情報を得るための調査を行なっています。今回の訪問でセレンゲさんから、働く場やグループホームなど暮らす場の必要性についての具体的な話や、少人数でも良いので、働く場を与え試してほしいといった意見も出ました。それに対して



【モンゴル政府の局長2名  
(左から2人目、右から2人目)との写真】

局長からは、モンゴルは一般の失業率が高いため、障がい者の働く場は給料を得る『就労』というより、社会参加を促進するための『福祉』と見ていたと言うコメントがありました。今年労働者に対する法律が大きく改正され、障がい者に対しても条例を取り上げる予定とのこと。セレンゲさんに対して政府の委員会メンバーへの参加要請がありました。谷口代表から35年前の日本も障がい者の仕事に関しては同じ状況だったことや、日本におけるジョブコーチのイメージについても話がありました。

#### ●第55 学校訪問

モンゴルは日本と同じ6-3-3制、9年間で義務教育です。この第55 学校は養護学校の一つで、障がい者が養護学校を卒業後、進学や就職につながりにくいことから2016年に高校を設立し2つの専門コースを作りました。現在28名、内訳は調理師コース16名、ホテル客室清掃員コース12名です。調理師コースは映像での授業と技術指導は専門指導員が来ます。清掃員コースは、教室内に本物のホテルの一室が作られていました。まだ卒業生を送り出していないので、実績はこれからですが期待できる印象でした。モンゴルの学校はバリアフリー化されておらず、身体に障がいがある生徒は親の送迎や階段移動の際には親が背負うなど大きな負担がみられます。行政からの援助はなく、インフラ整備が遅れていると校長が話してくれました。清掃員コースの授業を見学しました。教材を見て果物の名前を覚える授業でした。日本語で“りんご”と教えてくれた生徒もいて、真剣に授業を受けていた姿が印象的でした。

#### ●国立リハビリテーションセンター・病院訪問

センターと病院は政府の機関として、

①社会福祉②教育③健康の3つの政策を行っています。①はインフラ整備・5年以内のユニバーサルデザイン計画。②は職業訓練プログラム。現在10クラスです。③はヨーロッパ式と伝統式の医療を取り入れた病院。②職業訓練プログラムの服飾クラスは就職率60%ですが、ウェブデザインクラスでは受入れ先がバリアフリー化になっていないため就職につながりにくいそうです。なぜならモンゴルのユニバーサルデザインは働く側の環境整備が優先されていないからです。今後、企業・商社に政府の調査が入る事になっています。③のリハビリテーション病院の見学に行きました。理学療法・作業療法のための設備があり、伝統式と呼ばれるはり・マッサージ・漢方などの東洋医学の導入もされました。モンゴル全土から患者が来るリハビリテーション病院ですが、利用者は少なくまだまだ一般化されていない印象を受けました。



【APDC関係者に具体的な事例を紹介】

### 3. APDC関係者とのミーティング

5日はAPDCの事務所でミーティングをする一日でした。前半はスタッフ、理事、後半は親を中心とした家族がメインでした。

セレンゲさんの「APDCとしてこれから何をしていくべきか」というスタッフ、理事への問いに対して「働く場所をつくりたい」「グループホームをつくりたい」「両方

同時につくりたい」との意見が出てきました。客観的に見ると両方を同時に作り上げて展開をすることは困難なことです。また、グループホームをつくることができても、社会に受け皿となる場所は無く、グループホームに引きこもってしまうこととなります。社会との関わりについての重要性は、谷口・田口・西川がそれぞれ事例を持って説明をしました。また、組織運営については、APDCでは資金の話が出てきません。詳しく聞いてみると資金が潤沢なことではなく、先を見た資金調達が計画できていないことが原因です。そこで、ぱれっとが35年間行なってきた資金調達（バザー、会費、寄付金）について説明をしました。

モンゴルで、ぱれっとの事例や経験を紹介することによりモンゴルで活動をする人たちに対して活動のヒントとなっている実感を持ってました。ぱれっとは35年の日本での経験、多数の国との国際交流、国際支援の経験があります。今後も多くの国で必要とされているものと感じました。

最後になりましたが、モンゴル研修に関わった方々みなさまにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（ぱれっと理事 田口 雄一）

（ぱれっと事務局 西川 寿恵）

#### ◆◆【おかし屋ぱれっとでの実習】◆◆

おかし屋ぱれっとでは、セレンゲさんに製造と企業販売を体験していただきました。お願いしていた一つの作業が終わると、スタッフが声をかける前に他の通所員の作業を進んで見に行ったり、質問したり、全員とコミュニケーションを取っていました。セレンゲさんは「皆自分のやる事が分かっている、時間を見ながら行動でき

ることが素晴らしい」と感想を述べ、スタッフは当たり前のこととして注目していなかった点を、客観的な視点で通所員の能力と捉えていました。企業販売では、通所員と一緒に「いらっしやいませ」と日本語で呼び込みをして、たくさんのクッキーと「らぶらび」が2体も売れたことに驚いていました。

工房ぱれっとでは通所員と一つの机を囲んで「らぶらび」作りをしました。通所員一人ひとりに「ユニーク!これは世界にあなた以外の誰も作れない、すごいことですよ」と伝えていました。その人に合ったペースで作業ができ、通所員の獨創性を重視した商品を持っている工房ぱれっとの仕組みにも感心していました。セレンゲさんは「らぶらび」とその制作風景を見て“What’s beautiful?(美しいって何だろう?)”と自分に問いかけたそうです。作り方も完成形も個性的でバラバラ、「きれい、上手」といった価値観で成り立つような万人受けする商品ではありません。セレンゲさんのその問いはまさに、工房ぱれっとが「らぶらび」を通して世の中に問いかけたことを考えてきたことであり、国を超えてそのメッセージを受け取ってもらえたことを嬉しく思いました。

最終日のお別れ会では、セレンゲさんはモンゴルがどんな国か紹介してくれました。モンゴルの童謡と一緒に歌って、最後に通所員から日本の歌をプレゼントしました。（工房ぱれっと職員 村井沙和子）



【モンゴルについてのお話に興味津々】

## ◆◆【セレンゲさんとぱれっと】◆◆

セレンゲさんのおかし屋ぱれっとの研修の様子でもわかるように、彼女の積極的な姿勢は際立っていました。わからないことがあれば必ず問いかけ、感動することがあれば、それを言葉や表情で直接相手に伝える、このような国の違いを乗り越えた姿勢からは、もっと知りたい、深めたいという思いがしっかりと伝わってきました。これは、人と人との関係作りにはとても大事なことだと教えられました。

セレンゲさんにとっても、モンゴルの障がい者福祉のあり方を真剣に考える機会となりました。成長した障がいのある子どもたちが、社会で生きるための環境が整っていないモンゴルの課題が山積していることを実感したのです。「障がい者の真の自立」は今もなお、ぱれっとでも議論が続いており、我々もモンゴルを訪問して改めてその意味の重さを痛感しているところです。

セレンゲさんとぱれっとは、これからはスタッフの研修だけでなく障がいのある人たち同士の交流を実現させたいと、楽しい企画を皆で考えることになりました。

(PIJ代表 谷口奈保子)

## ◆◆【ケニア・モンゴル合同報告会】◆◆

6月23日(土)に、ケニア・モンゴル視察の合同報告会を開催しました。合同報告会の目的は、3月に訪問したケニア、5月に訪問したモンゴルでのそれぞれの学びを共有することから、PIJの今後と可能性について関係者全員で考えるためです。

## ・報告会全体の流れ

ケニア視察については黒澤から、モンゴル視察については西川、田口から、そして、

セレンゲさんの受け入れ研修については村井から、それぞれ報告を行ないました。訪問先の組織概要、抱える課題など、各自の視察内容や学びを簡単に報告した後に、パネルディスカッション形式で、参加者も巻き込みながら議論を行ないました。ケニアとモンゴルとでは、経済、文化、生活環境が全く異なり、視察団体の活動内容やミッションも異なります。それぞれ視察で得た学びを共有、比較することで各国・各団体にどのようなニーズがあり、今後PIJとしてどのような関わりができるのかを考える機会となりました。

## ・視察団体のニーズについて

視察団体の取り組み、抱える課題のキーワードとしては、障がい者雇用の促進、教育課題への取り組み、組織マネジメントの強化などが上がりました。その中でも、議論が盛り上がったのは組織マネジメントに関する課題とニーズについてです。ケニア・モンゴルで視察した両団体ともに、モヨ・チルドレン・センターの松下さん、今回のセレンゲさん、お二人の強いリーダーシップにより活動が支えられています。一方で、組織マネジメント、資金調達などを組織として行なうことの課題は共通して上がりました。このような海外で活動する団体が抱える課題に対して、PIJとしてどのような貢献ができるかは、今後も考えていきたいポイントだと感じました。

## ・国際交流の意義について

国際交流を通じて、海外で社会変革に取り組む団体やリーダーから学び、ぱれっとのことを客観的に分析する機会をつくれることは、ぱれっとの特徴・強みだと報告会を通じて改めて感じました。ケニア・モンゴルそれぞれの学びを現場で活かしていくと同時に、PIJの活動の意義や役割については、今後も議論を続けていきたいと考えています。

(ぱれっと理事 黒澤友貴)